鏡餅

森岡　正作

お元日嬰のものだけ干されあり

奴凧富士の稜線駆け上がる

占ってみたくなる罅鏡餅

枯野駆く獣のやうな息をして

寒の餅一先づ寝かす青畳

無造作に鯉下げ来たる寒見舞

釣具屋に溺れてゐたる春隣

初蝶を

登四郎先生の最後の句集『羽化』に〈**初蝶を見しよろこびを声にしつ**〉が載っている。晩年にして少女のような初々しさである。やはり「童心を失わない」ということであろうが、この句のすぐ後に〈**初蝶の素つ気なく我が庭を過ぐ**〉とあり、老人の心に戻っているのもおもしろい。

春は植物で言えば桜が、動物だと蝶がよく詠まれる。「蝶よ花よと育てられ」とあるように日本人好みなのであろうが、フランスのジュール・ルナールの「蝶、二ツ折りの恋文が花の番地を探している」はとても素敵である。ただ、これを言ってはおしまいであるが、私は蝶を美しいと思いつつ、ついお腹の辺りを見て大嫌いな毛虫を連想してしまう。『堤中納言物語』の「虫めづる姫君」の姫君には叱られそうであるが、何とも仕様がない。